2008 年 5 月 26 日

200 ドルに向かい始めた原油価格

原油価格は 200 ドルという声が各方面から聞こえ始めた。最初に 200 ドルの予想を聞いたのは、昨年原油価格が 90 ドル台に達した時である。その時は 100 ドルが上限であろうというのが大半の専門家意見であり、この 200 ドル説は単なる目立ちたがり屋の発言として捉えられるに止まった。しかし、その後、次のような関係者が 200 ドル説を唱え始めている。

①本年 3 月 EU の Piebalgs エネルギーコミッショナーが OPEC に対して増産を呼びかけ、もし OPEC の増産がなければ 2011 年までに 200 ドルになるという警告を発した。

②4 月 OPEC ヘリル議長がドル安とナイジェリア等の産油国の政情不安が続けば 200 ドルを突破する可能性があると表明

③5 月ゴールドマン・サックスが今後 2 年以内に 150 から 200 ドルに達するとレポートした

実際の原油価格の動きを見てみると、この 200 ドル説が現実性のあるものであることが解る。原油価格は、2007 年 1 月に 50 ドル台であったが、2008 年 1 月には約 100 ドルへと 2 倍に高騰している。そして今年の 5 月 22 日には早くも 135 ドルへと急騰を続けている。この傾向が続けば、今年中には 150 ドルとなり、来年中には 200 ドルに達することになる。

この急騰の背景には原油需給のタイト化がある。世界の石油需要は毎年 100 万バーレル/日(年間 5000 万トン)のペースで増加している。これは中国やインドなどの発展途上国の需要が伸びているためである。一方、世界の既存油田の生産力は減少しており、最近注目されているオイル・ピーク論(現在が生産のピークであり、これから徐々に生産が減少するという説)の示唆するとおりの減少傾向を辿っているようである。新規油田の発見では、昨年ブラジルの深海開発で超巨大油田(生産能力 100 万バーレル/日)が発見されたというグッドニュースがあった。この超巨大油田の発見は 2001 年のカザフスタンのカシャガン油田以来である。しかし、世界の石油需要の増加を賄うためにはこの超巨大油田が毎年一ヶ所発見される必要がある。超巨大油田は 10 年に一度見つかるかどうかというもので、それは期待薄としか言いようがない。

現在の石油需給タイト化を供給面で解決できるのは、世界一の産油国で生産余力のあるサウジアラビアが増産してくれることである。先日ブッシュ大統領がサウジを訪れ原油増産の要請を行なったが、サウジは 30 万バーレル/日の増産という回答を行なうに止めている。30 万バーレル/日の増産では原油価格の安定化にほとんど効果は無く、このままでは原油価格は高騰を続け 200 ドルは現実のものとなるように考えられる。

もし、このような原油価格急騰が続けば、原油を多く輸入している日本や中国にとって

はどのような影響があるであろうか。日本及び中国の近年の原油輸入量はそれぞれ 2 億トン(14.6 億バーレル)と 1.6 億トン(11.7 億バーレル)である。原油価格が年間 50 ドル/バーレル高騰すると、日本と中国はそれぞれ年間 730 億ドル(約 7.7 兆円)と 590 億ドル(約 6 兆円)を原油輸入額に上積みしなければならないことになる。原油価格の高騰の影響は、石炭等の他のエネルギーのみならず鉄鉱石、食料等広範囲の原材料に波及し、日本や中国の貿易黒字を吹き飛ばしてしまうことになる。インフレ不況は始まっているように思われる。

ではこの世界の石油需給を緩和するために日本や中国等の輸入国は何をなすべきなのか。それは国内需要を抑えることである。エネルギー利用効率を上げる技術開発や太陽光発電などの再生可能エネルギーの普及を早急に進める必要があるのは言を待たないが、最も早く確実で即効性のあることは節約である。この数年、地球環境問題から無駄な消費をやめることが謳われて来たが、これからは原油をはじめとする輸入原材料価格高騰に対応するためにも無駄の削減に国家として本気に取り組む必要が出てきたように思われる。

(エイジアム研究所 研究主幹　熊川　滉)

Asiam Research Institute
http://www.asiam.co.jp/